



ちょっとお茶にしませんか

第9話

鉄好人海外行

たばこのむかし物語と ケータイ

山本誠志

Masashi Yamamoto

日科情報株式会社 (元) 住友金属工業(株)

禁煙・分煙運動もかなり定着してきたようです。愛煙家のマナーもグッとよくなったようにも感じるこの頃です。「たばこ」は、政治家や芸術家などのシンボルマーク的な存在であったり、芝居や映画でもその場の雰囲気醸し出すために用いられたこともありましたね。

たばこに関するいろんな国での「むかし話」をしましょう。そのうちにこんな話は忘れられる時代も来ると思いますが。

むかし話 その1

技術交流会で、ある国の家電製品の製造工場を訪問した時のことです。会場のホールに入ったとたん、正面のブラウン管に「NO SMOKING」の文字が映し出されました。会議もすすみ、コーヒープレイクになりました。たばこを吸うひとは屋外の喫煙場所に移動しました。そこで、コーヒを飲みながらではなく、たばこを吸いながら、それまでの会議の内容を個々に議論しています。時間も過ぎ会議場に戻りました。会議再開です。でもコーヒープレイクの前と後では、明らかに雰囲気が違います。たばこを吸っていたひとたちは、その内容が次のステップに進んでいるのです。会議場でコーヒープレイクしていたひとは会議の進行に取り残されたのです。次のコーヒープレイクのときには、たばこを吸わないひとも喫煙場所に移動したというお話です。

むかし話 その2

ある国で夜、ミュージカルを見に出掛けました。世界的に有名なミュージカルでした。ほとんどが夫婦連れでした。それなりのおしゃれをして。前半の部が終わり、休憩時間になりました。それぞれに席を立ちます。ロビーに出てびっくりしました。多くのひとがたばこを吸っているのです。吸っているひとの大半が女性でした。その傍らでは、夫と思われる男性がじっと立っているのです。外に出てみました。外にもひ

とが溢れていました。そこも同じ風景でした。男性は職場での禁煙の習慣になれたのでしょうか。

むかし話 その3

また、さる国でオーナー社長の会社を訪問した時のことです。社長は私をお待ちかねだったようです。名刺交換をする前に、私の目前にたばこを差し出すのです。ひょっとしたら、歓迎の意味かなど、差し出された箱から1本引き抜きました。待っていたかのように、ライターで火を付けてくれました。社長もおもむろに同じ箱のたばこを引き抜き火を付けました。しばしスモーキングタイムです。まわりのたばこを吸わないひとたちは手持ちぶさただったことでしょうか。その社長が歓待するひとにのみ行う儀式だと、後で聞きました。仕事は予想以上の成果がありました。

むかし話 その4

ある国の現地のポピュラーなたばこには、香料が入っているものがあります。煙にも、なにか甘い香りがあります。吸い口にも甘い味が残ります。このたばこの愛好者はすれ違っただけでわかります。このたばこは日本でも市販されていました。試しに吸っても、2本目に手を出したひとはいませんでした。

むかし話 その5

海外で、手持ちのたばこを切らしたとき、途方に暮れることもあります。銘柄がわからないからです。一般的なたばこの銘柄を知るには、タクシーなどの運転手のたばこをみることです。運転席のまわりに置いています。値段も味も大きな外れはないようです。でも、たばこの味はその土地の気候と関係あるのでしょうか。日本に持って帰って吸ってもうまく感じません。

国によって、禁煙・分煙運動も異なります。その国の状況に応じてたばこを吸いましょう。

たばこのむかし話を書きましたが、このたばこの状況が、いまの「携帯電話」の状況と重なるように感じるのは私だけでしょうか。

歩きながらのケータイ、人混みでのケータイ、ベンチでのケータイ、電車を降りたとたんのケータイ、喫茶店でのケータイ、会議中のケータイ、デート中のケータイ、仕事が一区切りしたときのケータイ、緊急充電に走るケータイ、電磁波を出すケータイ、等々。

ここで「ケータイ」を「たばこ」と置き換えて読み直してみてください。たばこと携帯電話は非常に近いものがあると思いませんか。いかがでしょうか。